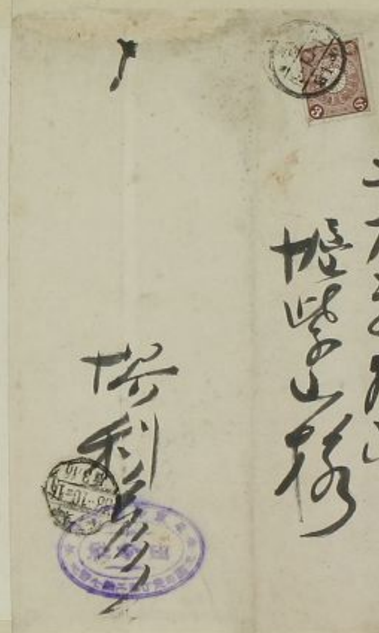
神田お茶の水
二六新報社
堀内宛



解何あれ位ても、
借の方は仕方ない
ダメらしい
いつやら洗ひた流
クヲはドウもう、
ぬい形があつ話
しと見て点丸、
仕方一つやらなく
んも寂しいた嬉
寂しい
病室新ぢも一樽
やらうかと思ひ
光と来洛中 同人 保子社
十三郎
紫山

神田、三六郎

堀内

元田方一番

堀内

先ごろ と 物語りたること
連名の宛ん〜〜一番
を覚しんか今ん程い
ていはるかよい、美し
とうかして伺ひたいの
からうか、書きの香
領ぼ考のあし

此頃にくん委敬田にある
本を鑑賞不正なる位
為ぬ中 大津利の花
沙汰にくんしのが、老
ひかりのなる時に送ん
こと、 汁ごとを麻的の
ひ、非常に面白い、
使かる沢ん〜〜

そは
て、其の所の
に、非常に面白い
俳かを択したいと思ふ
二六に其の世を世
たいと思ふ。四季は八月十
四信に、春秋は一四句
でよい。
却て多い句の方、佳句
かもしれぬ、逸品かもしれぬ
然に面白くない

十月廿九　　そら

峠の山之

先ごろ桜田門外の変
連名の密書を一通
を見しかば今に忘れ
ていまだ思ひかねまい美し
とゝかして伺ひまいの
ていらゝか、書書の香
傾はたのめし
此頃にくん委敷日にある
本書鎖港不正の儀
義勇軍 大評判の儀
少年行ゝ多の者、
ゝ行ゝ送ふ
ゝ者、計るを要的の
で、非常に面白い
僕が及ばしたいと思ふ
二六に載せて世くまい
ちゝ。四郎八の千
四信で、拙は一四四
ではない、
都合が悪いので、併
かもしか、思ひかゝる
併に面白くまい

十月廿

吉山之

之